

## 金飛礫のこと

——『鈴鹿の物語』と聖徳太子説話——

安 藤 秀 幸

室町物語の一篇『鈴鹿の物語』（『田村の草子』）は、としひと・としむねの親子二代による数度に及ぶ怪物退治を描く作品であるが、その中に、次のような場面がある（引用は万治三年写本<sup>(2)</sup>。本文引用に際しては適宜濁点を付し、句読点も私に変えた）。

大飛礫を取出して申けるは、「鐘<sup>(金)</sup>の数は一万五百両、角の数は二千八百也。高麗国にて五百年、唐土にて三百年、此山にて五六年、かほどおほき財宝を奪取は此飛礫故也。……手なみの程をうけて見よ」とて、左の手をば妻手の脇にはさみて、妻手の膝をつよくおして、右のひちをつよくいら、げて、是を頻<sup>(かさりカ)</sup>としばしためらいてなげかけけり。誠に百千のいかづち、なりまわるがごとし。……俊宗は馬を立なおし、

一つちがへて、つぶて、四方をなりまわりおちかゝる所を、そうなく、鐘<sup>(金)</sup>のはなにてけおとされけり。いかにも大仰な口上を述べて自慢の飛礫を投げつけたにもかかわらず、あつさりと面目を潰されたこの登場人物は「金飛礫<sup>かなつぶて</sup>」という<sup>(3)</sup>。彼は奈良坂を往来する年貢御物を強奪する盗賊であり、妖怪である。

『鈴鹿の物語』には大蛇や鬼神など様々な敵が登場するが、それらの多くは既存の説話や伝承に取材したものである。例えば、としひとに退治される鬼「悪路王」は、古くは『吾妻鏡』に記される「賊主」であり、としむねに討たれる鬼「悪事の高丸」は、『神道集』などで知られる朝敵である<sup>(5)</sup>。高丸についてはその討伐譚自体が『神道集』に基づくものであろうが、その他の怪物退治につ

いては敵の名前だけを借用したと思われるものもある。その一つが金飛礫退治譚である。そこで、本稿ではこの金飛礫を端緒として若干の考察を試みたい。

本題に入る前に、本稿で用いる伝本について述べておく。『鈴鹿の物語』の諸本関係については以前論じたことがあるので詳しくはそちらを参照されたいが、現存諸本は大きく二つに分けられる。一つは室町後期の写本を含むもので、本作本来の姿をとどめられるものがある。仮にこれを写本系と呼ぶ。もう一方は江戸初期に成立した古活字版と、それに連なる版本や写本である。こちらは本文がほぼ固定されており、流布本系と呼んでおく。金飛礫退治譚はどの伝本にも共通して登場するのであるが、ここでは写本系を用い、その中でも、独自改変の少ない万治三年写本を中心に用いることとする。

## 一 「奈良坂の金飛礫」について

### 一 ―

まず、『鈴鹿の物語』における金飛礫について、その登場前後の流れを含め、改めて紹介しておく。

としひと將軍は唐土攻めに失敗し、戦死する。跡を継いだとしむねに、ある時、「奈良坂に金飛礫とい

う化物が現れ、往來の年貢を奪っているので退治せよ」との宣旨が下る。としむねは五百余騎の軍勢を率いて奈良坂に向かい、賊を誘い出す。すると身長五丈ばかりの法師姿の化物、金飛礫が現れ、巨大な金の飛礫を次々に投げかけるが、としむねはこれを扇や鞭、鎧で軽々と打ち落とす。自慢の飛礫をすべて落とされ慌てる金飛礫に対し、としむねは神通の鎧矢を射かける。鎧矢は金飛礫の耳の根に立つて鳴り響きつづけ、戦意を挫かれた金飛礫は降参する。としむねは金飛礫を生け捕りにして帰洛し、朝廷の命令によって金飛礫を処刑する。この功績により、としむねは生まれ故郷の陸奥国田村郷を賜り、田村の將軍と号した。

その後、今度は「伊勢の鈴鹿山に立烏帽子という女が現れ、往來の年貢を奪っているので退治せよ」との宣旨が下る。

目を引くのはやはり、巨大な飛礫を投げけるという点である。言うまでもなく、金の飛礫を投げるから金飛礫という名なのであるが、先に述べた通り、本作は先行する説話や伝承を多く取り入れており、ここでの金飛礫も、既に存在する人名を取り込んだものである。従って、彼

は金の飛礫を投げるから金飛礫であるというよりは、金飛礫という名前であるからこそ金の飛礫を投げる描写がある、と言った方がより実態に即しているよう。そこで、本作以前の「金飛礫」を確認しておきたい。

金飛礫という名を記す最古の例は、知られている限り、一卷本『宝物集』である。<sup>(7)</sup>

コノ世ニモ、ナラサカノカナツブテ、スバカ山ノタチエボウシナド申物侍ケリ。ヒダカノ禪師、海之羊<sup>ツマ</sup>ミナド申ケルヌスビト<sup>ツモ</sup>モ、イヅレカツヒニヨクテ侍ル。手キラレ、クビキラレ、ヒトヤニヰテ、カナシキメラノミコソハミナミル事ニテ侍メレ。鉄ハ針ニテハテ、ヒトハ盗ヲモテヲヘ侍ナリ。後生ノセメヲハ、コレヲモテ思ヤリ給ベキナリ。

<sup>(8)</sup>不偷盗を説く段であり、他の山賊・海賊と並列されている。このような記述を見ると、彼は有名な山賊であり、討伐されたのであろう。あるいは個人名ではなく、賊徒の総称であったかも知れない。少なくとも『宝物集』を編んだ平康頼にとって、特に注釈の必要のない存在だったようである。

金飛礫が有名な山賊だったらしいことは、他の作品からもかろうじて窺える。鎌倉中期の『石清水物

語』卷上に、次のような場面がある。<sup>(9)</sup>

（伊予守）しばし立ち聞けば、少納言の乳母の声にて、「をやみなく降る雨かな。かかる折は、盗人といふなる者こそありくなれ。今宵はされど、頼もしき人のものせらるめれば、かなつぶてと言ひけん者なりとも、やすくしたためてん」と言ふなれば、娘なる弁、「げに人離れたる所にて、かかる雨夜などはもの怖ぢせさせ給ふに、こよなく頼もしくこそなりにたれ。あはれ、いつもかくておはせかし。

……」

主人公である伊予守が木幡の姫君のもとに忍び込もうとしている時、屋内から聞こえてきた会話である。ここでの「かなつぶてと言ひけん者」も『宝物集』のいう「ナラサカノカナツブテ」と同じ人物のことであろう。右の場面の舞台は木幡であるから、場所が比較的近い奈良坂にいた盗賊の名を出したものと思われる。しかしここでも、金飛礫は有名な盗賊だったということしか分ならず、具体的にどのような賊なのか、どのような末路をたどったのか、その辺りは不明のままである。

鎌倉期の二作品に現れた金飛礫の名が、再び文字として記されるのは室町後期まで下る。それが『鈴鹿の物

『語』であり、幸若舞『未来記』である。ではここで『未来記』の冒頭を見てみよう。<sup>(10)</sup>

さる間、牛若殿、鞍馬の奥僧正が崖と云ところへ、夜な／＼通ひ給ひけり。天下を治めん其ために、兵法稽古の嗜み也。そも／＼兵法と申は、三略の七書たり。昔大唐商山のそうけいが伝へし秘書なり。吉備の大臣入唐し、八十四卷が中よりも、四十二帖に抜きかへて、我朝へ伝しを、坂の上の利仁、九年三月に習ひ、天下を治め給ふなり。扱其後に、田村丸十二年三月に習ひ、奈良坂山のかなつぶて、鈴鹿山の立烏帽子、かゝる逆徒を平らげ、国を鎮め給ふなり。

立烏帽子との並列は一卷本『宝物集』と同様であるが、田村丸（坂上田村麻呂）に討伐されたという情報が増えている。もつとも、これが康頼の知る金飛礫の末路と同じかどうかは分からない。むしろ異なっている可能性の方が高いように思う。『宝物集』の挙げた賊のうち、「ヒダカノ禪師」は<sup>(12)</sup>保延元年（一一三五）、平忠盛に捕縛された海賊の首領である。立烏帽子については、半井本『保元物語』中「白河殿へ義朝夜討チニ寄セラルル事」に、山田是行が「昔、鈴鹿山ノ立烏帽子ヲ擲テ、帝王ニ奉シ

山田庄司行季ガ孫也」と名乗っている。<sup>(13)</sup> 流布本はこの山田庄司行季（行末）の手柄について、立烏帽子の件ではなく「堀河院の御宇、嘉承三年正月廿六日、対馬守義親追討の時、故備前守殿の真前懸て」としており、これを踏まえれば立烏帽子もその頃の盗賊と考えて良からうか。<sup>(14)</sup> 「海之羊ミ」（久遠寺本「ウミノ平三」）については現在のところ詳細を知らないが、これらを見るに、『宝物集』のいう「ナラサカノカナツブテ」も日高禪師や立烏帽子と同様、平安後期から末期ごろの盗賊だったのではないか。そしてその具体的なイメージが失われた後に、田村丸に討たれたという説が付け加えられたものと見たい。<sup>(15)</sup>

## 一 二

ここで一旦、『鈴鹿の物語』と『未来記』の関係について触れておきたい。『鈴鹿の物語』の前半は、藤原利仁を元に造形されたとしひとが主人公である。後半はその子のとしむね（田村の将軍）が主人公であり、こちらは坂上田村麻呂が元になっている。としむねは金飛礫を退治した後、鈴鹿山の女盗賊立烏帽子の討伐に向かう。ところが立烏帽子（鈴鹿御前）との対決に敗れ、彼女と結婚し、その後は鈴鹿御前の助力を受けて高丸や大嶽と

いった悪鬼を退治することになる。

先学の指摘のとおり、この〈としひととしむね〉という親子関係は、平安中期の武將藤原利仁と、平安初期の田村麻呂という、時代が転倒する上に氏族も異なる二人を親子にしたものである。<sup>16</sup>ここで、先に引用した『未来記』の記述をもう一度見てみよう。

坂の上の利仁、(兵法ヲ)九年三月に習ひ、天下を治め給ふなり。扱其後に、田村丸、十二年三月に習ひ、奈良坂山のかなつぶて、鈴鹿山の立烏帽子、かゝる逆徒を平らげ、国を鎮め給ふなり。

「坂の上の利仁」なる人物がまず兵法を学び、「扱其後に」田村丸もまた兵法を学んだという。つまり『未来記』も『鈴鹿の物語』と同様、利仁と田村麻呂の時代を逆転させているのである。同時に、利仁は「坂の上の」である。これは二人が同じ氏族、もつと言え、おそらくは親子と考えてのことであろう。さらに、田村丸が金飛礫と立烏帽子の両者を討ったとしており、これも『鈴鹿の物語』と近似する。二つの作品の間には何らかの関係があろう。

幸若舞『未来記』は御伽草子『天狗の内裏』と同様、幼少期の義経が天狗から未来を教えられるという内容の

曲である。その構成や成立期について、小林健二氏は『幸若舞曲研究』別巻(三弥井書店、二〇〇四年)の曲目解説において、次のように述べておられる。

「天狗の内裏」の未来語りと「未来記」のそれとを比較すると、古伝承を集成した観のある前者に対して、平家物語から記事を抄出し、他の舞曲本文をも参看して文句を紡ぎだした後者は、いかにも人工的な臭が強い。極論すると、机上の作業によって成ったものと推測することも可能である。……成立の時期も、先行の舞曲諸作品が出揃って、レパートリーとして固まった、室町の終わり頃と推定できそうである。

小林氏の説に従えば、『未来記』は『鈴鹿の物語』よりも新しく、両者の類似は、『未来記』が『鈴鹿の物語』の要素を取り込んだ故という可能性もある。とはいえ、先ほど紹介したように、『鈴鹿の物語』では田村は立烏帽子に敗れており、「かゝる逆徒を平らげ」という『未来記』の記述とは食い違う。『未来記』から『鈴鹿の物語』へという影響関係、あるいはその逆というよりは、『宝物集』以来の対句的表現がいつの間にか田村丸説話と組み合わせ、『未来記』と『鈴鹿の物語』の両方に

それぞれ現れたと見るほうが良からう。

## 二 金飛礫退治譚と『聖徳太子伝』

### 二一

金飛礫という山賊そのものについては、結局のところ、以上の程度にしか分らない。一方、『鈴鹿の物語』における金飛礫退治の描写に関してはどうか。「金飛礫」という盗賊名から想像される情景を、『鈴鹿の物語』の編者が創作したのであろうか。そこで、改めて『鈴鹿の物語』の金飛礫退治譚を少し詳しく確認したい。まず、本文は次のようになっている。

(としむね、五百余騎の軍勢を率いて奈良坂山に向かい、金飛礫をおびき出すために綾羅錦繡を広げ干す。金飛礫、それを見て荷物をよこせと要求する) 俊宗の給ふやう、「御物は大やけの物、命は私の物なり。生てあらん程はとらるまじき」との給へば、「希代成くわじやが言葉かな。ことごと敷とは思へ共、くわじやがけいき、にくければ、請て見よ」とて、三郎飛礫をなげ出す。「鐘の数、一千八百両の重さ也。角数は二百六十也。心から死難事こそむざんなれ」とてなげかくる。俊宗、少もさはぐ事なくて、扇を持て

討落す。……(金飛礫、続いて二郎飛礫を投げるが、としむねは鞭で打ち落とす) ……(金飛礫ハ) 大飛礫を取出して申けるは、「鐘の数は一万五百両、角の数は二千八百也。高麗国にて五百年、唐土にて三百年、此山にて五十六年、かほどおほき財宝を奪取は此飛礫故也。……手なみの程をうけて見よ」とて……なげかけけり。誠に百千のいかづち、なりまわるがごとし。……五百余騎の武士共、此響におそれてひれ臥成り。俊宗は馬を立なおし、一つちがへて、つぶて四方をなりまわりおちかゝる所を、そうなく、鎧のはなにてけおとされけり。扱、世間はもとのごとくしづまりて、いまわ、かなつぶて、たのみたる飛礫をば皆とられぬ、力を失いて、傍へ忍びけり。「くわじやが頭だまし、眼ざしを始而、いかさまけおとしぬとおもひたれば、少もたがわず」との、しりて、俊宗被仰けるは、「そなたのつぶてに、皆見申さぬぞ」と申候而、「一代、二代、三代、相伝して持て、見参に入れ候は、いかゞ候べき」とて、角の月弓、神通之蕪を能引而はなち給へば、かなつぶてが左の耳ぎわに、三寸計のきて立、たか山を走とも、なへもおとらず。余りたへがたさに、七日と

申に、利宗の前にて、参りて申けるは、「いかなる人の射る矢も十町には過ず、遠矢も一日路飛たるこそ有難き事成り。七日七夜に成つれば、いかでか雲のはてまでも見ざるべき。何とて、我は、くわじやが矢はくせぐしき矢ぞかし。今日より後は悪すべからず」とぞ申けるを、千筋の縄をとりつけて、五百余騎の中においたて、栗田口より都へ此由を申されければ、頼而来るべしとて、死罪におこなわれり。

引用した万治写本の本文は、他本と比べて独自改変は少ないものの、当て字や誤字脱字が多く読みにくい。先の紹介と重複する部分もあるが、記述を整理しながらこの箇所の特徴を把握していこう。

金飛礫が現れたのは大和の奈良坂山であつた。そこに、としむねは五百余騎の軍勢を率いて向かう。とはいへ、この軍勢が何らかの働きを見せるわけではない。軍勢の描写といへば、太郎飛礫の響きに恐れてひれ伏す箇所と降参した金飛礫を捕縛する場面しかない。金飛礫退治は実質的にとしむね一人の力で成し遂げられており、また、金飛礫もとしむね以外の兵士に言及することはない。

金飛礫は若いとしむねを侮りつつ、三郎飛礫・次郎飛

礫・太郎飛礫と名づけた飛礫を順に投げる。この飛礫は、例えば三郎飛礫では「鐘の数、一千八百両の重さ也。角数は二百六十也」というような、非現実的な重さである。これらは轟音を立てながら飛来するが、としむねはそれを軽々と打ち落とす。三郎飛礫は「俊宗、少もさはぐ事なくて、扇を持て討落す」、次郎飛礫は「むかふさまに、ぶちを持てうちおとされければ、此飛礫もとられぬる」、太郎飛礫は「そうなく、鐙のはなにてけおとされけり」と、飛礫の仰々しい描写と比べれば、読者に肩すかしを食らわせるかのごとき簡略な記述になっている。

頼みの飛礫をすべて打ち落とされた金飛礫に、今度はとしむねが神通の鎗矢を放つ。鎗矢は左耳近くに立つて鳴り響き、金飛礫がいくら逃げ回ってもその音が鳴り止むことがない。弱り果てた金飛礫は七日目になって降参、としむねはこれを捕縛して帰洛し、朝廷の指示により処刑する。

以上の特色を単純化してまとめれば、次のようになる。(1) 山に現れた賊に対し、年若い主人公が単身で立ち向かう。(2) 賊は巨大な飛礫を投げるが、主人公はこれを拍子抜けするほどにあつさりといなす。(3) 主人公が鎗矢を一度射かけるだけで、その音にさいなま



れた賊が降参する。

このようにしてまとめた時、特に（3）については、物語の流れを踏まえて見るとやや問題がある。というのも、金飛礫は降参した甲斐もなく処刑されるからである。そもそもしむねが受けた宣旨は、金飛礫を「失て参らせよ」というものであった。たとえ金飛礫が神妙に「今日よりは悪すべからず」と降伏しようとも、結末は決まっていたと言える。しかし、それではなぜとしむねは、鎬矢で追い詰めるなどという迂遠な手を取った上、一旦は金飛礫を生け捕りにしたのか。事実、特異な改変本文である大東急記念文庫蔵本（東急本）の描写は、先の引用とは大きく異なる<sup>(17)</sup>。

じんづうのかぶらやをとつてつがひ、きりく〜とひきしほり、かなぐりはなしにはなし給へば、みぢんになさんととんでかゝるにうだが、めてのみ、にはつしとあたる。……（金飛礫、さらに膝を射られて逃げ出すが、鎬矢の毒に苦しむ）……さしもにたけき入道も、めくれ、こゝろもきえければ、いまいちど、かのくわじやにあふて、せうぶをせんために、ありしところへよろぼいて、としむねの御まへにて、もろひざついてふしにける。としむね、いよく〜ちか

らをえて、やつぎばやにい給へば、なんなくいふせられて、すこしもはたらかざるところを、つはものどもはしりゆき、とつてをさへて、くびかきおとし、むくろはずんく〜にきつてすて、くびをばつちぐるまにのせ、みやこへひかせ給ひけり。

文章も展開も脚色が多く、ほとんどなぶり殺しといった体であるが、このようにその場で殺してしまうほうが怪物退治譚としては当然のように思える<sup>(18)</sup>。にもかかわらず、東急本を除いて、他本ではすべて金飛礫を一旦は捕縛してから処刑している。そしてまた、金飛礫を直接討ち取る東急本でさえも、征矢ではなく鎬矢を用いている。これは一体何に由来するのであろうか。そしてまた、先の（1）（2）も、その下敷きとなりうる説話が存在するのであろうか。

結論を先に言おう。金飛礫退治譚の元になった説話は、中世に流布した『聖徳太子伝』の一節である。

## 二―二

用明天皇第二皇子、厩戸皇子は聖徳太子の名で広く知られている。もつとも、その事跡として知られる数々の業績が、歴史的事実として彼のものであるかどうかには



様々な疑義が提出されているが、今はそれを問題とはしない。今ここで重要なのは、太子が古くから尊崇の対象とされ、『聖德太子伝暦』を初め、数多くの伝記が編まれたということである。中でも、文保本系と称される太子伝やその周辺の伝記群は、様々な説話をふんだんに含んでいる。その太子伝に、次のような段がある（以降、広義の文保本系『聖德太子伝』<sup>(19)</sup>を中世聖德太子伝の代表として扱い、『太子伝』と表記する。要約や引用に際しては仮名書きの寛文六年刊本を用いた<sup>(20)</sup>）。

聖德太子十歳の年、春二月、千島の夷が蜂起した。

大軍が王城に迫ったため、帝は稲渕山へと脱出する。進退窮まった帝が太子に助言を請うと、太子は、強いて戦えば敵味方ともに殺生の罪業を作るばかりであると云い、また、みずからが単身で夷を鎮撫すると言う。太子は白馬に跨がり、蘇我馬子一人を供に夷の城に向かうと、神変をふるって夷を降伏させる。夷の大將軍らは太子の教誡に従い三輪明神に起請して日本への帰服を誓うと、千島へと帰った。

太子が通力を示すことはもとより、十歳に過ぎない太子に天皇が助言を求めることからしておよそ現実味のない説話であるが、原拠は『日本書紀』敏達天皇十年閏二

月条である<sup>(21)</sup>。

十年の春閏二月に、蝦夷数千、辺境に寇ふ。是に由りて、其の魁帥綾糟等を召して、詔して曰はく、「惟るに、爾蝦夷を、大足彦天皇の世に、殺すべき者は斬し、原すべき者は赦す。今朕、彼の前の例に遵ひて、元惡を誅さむとす」とのたまふ。是に綾糟等、懼然り恐懼みて、乃ち泊瀬の中流に下て、三諸岳に面ひて、水を敵りて盟ひて曰さく、「臣等蝦夷、今より以後子孫孫、清き明き心を用て、天闕に事へ奉らむ。臣等、若し盟に違はば、天地の諸の神及び天皇の靈、臣が種を絶滅えむ」とまうす。

当然ながら、太子に関する記述は一言もなく、蝦夷を帰服させるのは敏達天皇である。ところが『聖德太子伝暦』は、天皇の詔勅や蝦夷の起請の文句を書紀から全面的に借用しつつも、そこに太子を登場させる<sup>(22)</sup>。

春二月、蝦夷数千、<sup>しば</sup>邊境を寇<sup>を</sup>す。天皇、群臣を召して征討の事を議<sup>た</sup>りたまふ。時に太子、側<sup>た</sup>に侍りて、耳を左右に竦<sup>そ</sup>てて、群臣の論ふことを聞く。天皇、近く太子を召して詔して曰はく、「汝が意に如何」。太子奏して曰く、「小兒何ぞ国の大事を議るに足らむ。……児が意におもんみるに、先づ魁帥を召して

重ねて教諭を加へて、其の重き盟<sup>ちか</sup>ひを取りて、本洛に放ち還して、加<sup>ます</sup>重祿を賜て、其の貪性を奪はむ」。天皇大きに悦びて……（天皇、蝦夷に詔勅を下す。蝦夷はそれに従い帰服する）。

これを元に、さらに大幅な誇張と脚色を加えたものが文保本系『太子伝』の記述である。<sup>(23)</sup>では、『太子伝』における聖徳太子と東夷の対決を見てみよう。

太子、たゞ御一人、しろき御馬にめして、えびすが城へうちむかはせ給ひける。……（太子を見て、夷はそれが聖人であることを見抜くが）「これほどの幼少なる小童、たとひ聖人たりといふとも何事かあらん」といやしめたてまつる。これこそえびすが運のつくるはじめのことばなれ。そのときに太子、彼えびすどもをがうぶくせんがために、はじめて神力をげんじ給へり。……（太子、馬に乗って虚空を駆け、蹄で周囲の岩山を微塵に蹴り砕く）……城内城外のえびすども、「神国なるによつてたちまちに神明のげんじきたりたまへり」と、おほきにをそれあはて、副將軍のあらえびすども、ばんじやくをいだきて、はるかあたかき峯より太子になげかけたてまつり侍れば、太子すこしもさはぎたまはず、金の御むちにうちあ

はせ、たかさ一丈ばかり、七度まで上たまひましくて、そのち、にしにとをくながたまひければ、ばんじやく、らいでんのごとく、こくうをひかして……（奥州・三河・播磨に落ちる）。次に副將軍あらえびすは、どくの矢をはなし、射たてまつりければ……御ぶちにて、こくうへなげあげたまひければ、ふた、び大地におちずして、打失侍りけり。次に二の矢を又御ぶちにかけて、にしにむかつてなげたまひければ、はるか西、紀伊国の日前宮鳥居になげ立給ひければ、夷ども、すでにたのむ所のぶげいの道きはめて、術つき侍りければ、にはかに霧を世間にふらし、とこやみなし侍りければ、太子又、たちまちに霧をはらし給ひければ、城内城外のえびすども、しんだいきはまつて、おほきにぎやうてんし侍りける。

『鈴鹿の物語』の描く金飛礫譚との類似は明らかである。前節で挙げた三点の特色に即して言えば、（１）金飛礫退治も東夷鎮圧も山を舞台とする。そしてとしむねも太子も年少者であり、相手に侮られる。また、どちらも馬に乗っており、馬に乗ったまま相手の攻撃をいなす。（２）金飛礫は巨大な飛礫を三度投げが、としむ

ねはこれを軽々と打ち落とす。一方、夷は、最初は盤石を投げ、二度目と三度目は毒矢で攻撃するが、いずれの場合も太子は鞭ではね飛ばす。ただし、それらに続く、霧を降らす・晴らすという部分に相当する描写は『鈴鹿の物語』にはない。

続いて、太子が夷を降参させるくだりをはどうか。

時に太子、わがてうの弓矢の力用をおもひしらせんとおぼしめして、方便定恵の御弓に神通のかぶら矢をとつてうちづがひ、よつ引てはなし給ふ。これは三目の角鐮なり。らいでんのごとく声を出し、えびすが城を七反までなりめぐりて、天になりあがり、地になりくだり、上下らいでんして、一々の城の中のえびすどもの心をめいわくせしめ、弓矢のもとすゑをわきまへず。しかうじてのち、四人の大將軍の頭につきてなりめぐりければ、かんにんすべきやう侍らず。よつて四人の大將軍、城の内をまかり出て、太子の御前にひざまづきて、たなごゝろをあはせ、「しかるべくは命斗を助給へ」とかうさんし奉る。

『鈴鹿の物語』と比較すると、(3)としむねも太子も、神通の鐮矢を一矢射るのみである。鐮矢は敵の耳元で鳴り響き、金飛礫も夷も憔悴して降参する。

このように、『鈴鹿の物語』金飛礫退治譚の特色である(1)(2)(3)は、いずれも『太子伝』東夷鎮圧説話と共通する。ただし、両者が大きく異なる点もある。それは敵が降参してからである。

太子は降伏した東夷の大將らにその意趣を質し、こう述べる。

「をのれら、いまわが朝にわたる事、所存何事ぞや。をよそ上代をかんがふれば、我朝人王十二代景行天王の御時、なんぢらが先祖のゑびすども、いまのごとく、おほくのけんぞくをいんぞつして、日本をしだがへんとほつするときに……一人も本国にかへさず誅せらる。今もむかしの旧例をもつて一人もたすくべからず、誅せらるべきよし群臣一同に僉議すでにさだまる。今は東西南北の軍兵、雲霞のごとくはせきたるらん。なんぢら命をたすからむ事、一人もあるべからず。しかるに阿児はせつしやうをふかくいましむるあひだ、かなはざるまでも、なんぢらをたすけんがために密に発向せり。はや／＼をのれらが所存を申べし」。

これに対し東夷の大將らは、今回の件は先祖の雪辱戦であること、日本半国を支配しようとしてのことである

と答える。すると太子は、日本は神明擁護の国であり彼らの望みは達成不可能である旨を教訓する。夷は「ふかく信教のおもひをなし」て「しかるべくは命ばかりをたすけたまへ」と降参、太子は以後反逆を企てぬよう三輪明神に祈誓させた上で、彼らを許すのである。

その、ち大慈大悲のあまりに日本のてうほうたる色々の綾錦等を祿物にあたへ給ひければ、夷どもいよく太子の御報恩をおもひしりたてまつり、立帰り礼をなし、本国にかへる。……後、すでに七百余歳の今にいたるまで、千島のゑびす、日本に発向する事なかりき。

この結末は、降参した金飛礫を処刑してしまう『鈴鹿の物語』とは正反対と言つても良い。だがそもそも、『太子伝』で東夷の襲来に際し聖徳太子が登場するのは、太子が語る通り「せつしやうをふかくいましむる」が故であった。そしてまた、この段の原拠である『日本書紀』も敏達天皇が夷を帰服させたとしており、その意味でもここで太子が東夷の降伏と帰国を許すのは当然の流れであるし、また、鎬矢の音という殺傷能力のない方法を用いるのも理に適つていよう。これに対して、『鈴鹿の物語』は当初から金飛礫の討伐が目的であつて、鎬矢

で敵をさいなむのも、降参を受け入れるのも、その目的に合わないのである。この不合理こそ、『鈴鹿の物語』金飛礫退治譚が聖徳太子東夷鎮圧説話を元にして組み立てられている証左と言えるのではないか。つまり、『鈴鹿の物語』の編者は、金飛礫退治譚を構成するにあたり殺生によらず敵を心服せしめたという点にこそ価値があるはずの『太子伝』東夷鎮圧説話をそのまま利用してしまつたが故に、本来の筋書きである怪物退治にふさわしくない部分まで真似てしまったと考えられるのである。

### 三 龍馬入手譚と太子説話

#### 三一

ところで、『聖徳太子伝』において、聖徳太子が鎬矢で敵を討つ場面はもう一つある。太子十六歳条、物部守屋討伐譚である。

（排仏派の中心人物である物部守屋は聖徳太子と対立し、遂に挙兵する。太子は一時危うい状況に陥るものの、二人の客将の援助を得て盛り返し、守屋との決戦に挑む）こ、に守屋、城に引こもり、ふせぎた、かふ。守屋おほきなる榎木の夸に矢藏をあげ○のぼつて、八目のかぶら矢をうちつがい、ちかつていはく、「この

矢は物部府都大明神のはなし給ふ矢なり」とてはなせば、太子の、いくさの下知してまします弓手の御あぶみにあたつて、矢はむなく地に落ちぬ。太子、跡見臣に命じて定の弓を和して恵の矢を順にして弓を引、矢をはなつ時、「……抑この矢は我はなすところの矢にあらず。かたじけなくも、仏法護持の四天王のはなし給ふところの降伏自在の御矢なり。願力むなしからず」ととつてからりとうちつがひ、よつ引てはなす。そのころ雷のごとし。天に上、地に下、稲村城を七度までなりめぐる。城の中の軍兵、めいわくしてぎやうてんす。しかうじてのち、天地四方らいでんし、守屋大臣のよろひのむないたにあつて、うしろのあげまきの下に十文字いとをさける。まことにぎやくざい武勇のめい大将なりといへども、毒矢むねにたちければ、まなこくらくして、やぐらのうへよりまつさかさまにどうどおつる。

ここでも、太子は敵の攻撃を鎧でやり過ごすうえ、城に籠もる敵に対して鎗矢を射る（射させる）と、鎗矢は「七度までなりめく」り、敵兵は「めいわくしてぎやうてん」、さらに「天地四方らいでん」と、東夷鎮庄説話によく似た描写がある。しかし東夷鎮庄説話では敵が降

伏したのに対し、ここでは鎗矢が守屋を射貫く<sup>(25)</sup>。また、盤石を投げるといふ描写もない。この点において、『鈴鹿の物語』金飛礫退治譚との違いは明らかである。このことから、金飛礫退治譚の元になったのは守屋合戦説話ではなく、やはり東夷鎮庄説話であると考えられよう。

しかしその一方で、守屋合戦説話と『鈴鹿の物語』には多少の関わりを見出だすこともできる。ただし、それは『太子伝』の守屋合戦ではなく、『善光寺縁起』の守屋合戦である。

### 三一 二

信濃善光寺の本尊阿弥陀如来はかつて排仏派により難波の堀に捨てられた仏像であつた、という説話は良く知られているが、『善光寺縁起』はこの説話に聖徳太子と物部守屋の合戦説話を大幅に取り込んでいる。その描写には種々の改変があるものの、元になっているのは明らかに『太子伝』である。しかし、『善光寺縁起』の守屋合戦説話は、『太子伝』のそれとは大きく異なる要素が加えられている。それは馬にまつわる説話であり、それこそが『鈴鹿の物語』との繋がりを見出だしうる要素である。そこでまず、『鈴鹿の物語』における問題の箇所

を見ておこう。

『鈴鹿の物語』の後半には、悪事の高丸という鬼神が登場、これを退治せよとの宣旨が田村（としむね）に下る。この高丸討伐譚自体は、『神道集』巻四・十七「信濃国鎮守諏方大明神秋山祭事」を換骨奪胎した鬼退治譚であるが、今はそれについて論じることはいらない。

鈴鹿御前と共に高丸退治を成し遂げて喜ぶ田村であったが、それに対して鈴鹿は次のように言う。

「いかゞはすべき、悪じの高丸討て、殿にもたのまれ参らせ、我も憑まいらせべきに、又、かなふまじきことの候べきぞや。それをいかにと申に、今三とせ有て、陸の国、霧山が嶽成大竹、討て参らせよと云宣旨、定而蒙らせ給ひ候はん。彼大竹は、始より、童をぐせんと申て、後に、殿にぐしたる由聞て、にらみしひかり、殿は稲妻とこそ被仰しか、いかさま、あすの午の時には来りなん。此度はとられてゆかんと思ひ候成り」。

高丸退治に先立って、鈴鹿は田村の裏切りに失望して彼の元を去っていた。高丸退治での協力をきつかけに二人は復縁するかと思われたが、鈴鹿はそれはできないと言う。というのも、彼女に以前から言い寄っていた大竹

（大嶽）という鬼が、いよいよ彼女を捕らえに来るからであった。鈴鹿はこれを機会に、今回は大嶽にわざと捕られようと言ひ出す。<sup>(26)</sup>それは、「大嶽ノ」正念を抜て、やすく、殿に討せ奉らんため、みづからが犠牲となつて田村に鬼神退治の手柄をあげさせるためであった。突然の事態に困惑し、別れを拒む田村に対し、鈴鹿は言う。

「急上り給ひて、此度は、よからん馬にめして、一人御下候へ」。

かくて田村は甲斐、信濃、陸奥に至るまで名馬を探し求めるが、ふさわしい馬に巡り会えない。ところが都の五条大宮で「たをかれ馬」を見出だし、一貫五百文という大金で買い取るのである。「たをかれ馬」の意味ははっきりしないが、売り主の翁が馬に対して「構てく明日の寅時迄いきよ」と言っているところを見るに、今にも倒れそうな痩せ馬なのであろう。田村はその痩せ馬を奇妙な飼育法によつて、空を飛ぶ龍馬に育て上げた。<sup>(27)</sup>そして三年後、鈴鹿の教えの通り、大嶽を退治せよという宣旨が下る。

本よりごせられたる事なれば、態「思ふ用のあり」とて、御勢をは給はらずして、たゞ一人、彼龍に乗て、かなみの源太と申て、一の郎等に、そはや

の剣をもたせて、三百余里の道なれ共、たゞ一足にぞ飛つかせ給ひけり。

こうして田村は大嶽の住処に到着したのであった。

さて、以上のような展開を見た時、少々の違和感がないではない。鈴鹿はなぜ、「よからん馬にめして、一人御下候へ」と言ったのか。もちろん、説話や伝説、物語における一種の定型として、化物退治は一人ないしは少人数で達成されるのが常である。八岐大蛇神話や『酒吞童子』がその典型として挙げられよう。しかし馬についてはどうか。

馬を神秘的な動物として扱う作品は中世に少なくない。しかし、その典型例と言える説経『小栗』にせよ、『毘沙門の本地』にせよ、「馬は馬頭観音の化身」というような定型句はあっても、怪物退治あるいは朝敵討伐に龍馬が必須であるというような描写はない。ところが、『善光寺縁起』には次のような記述がある。<sup>(28)</sup>

（聖徳太子十六歳の頃、物部守屋は太子を討たんと兵を挙げる。太子も兵を挙げるが、兵力は不利）時に蘇我大臣申し給ひけるは、「伝へ聞く、昔異国に大王まします、周の穆王と名づく。名馬を持ち、（八匹の）駒と名づく。此の天馬に乗りて虚空に飛び給ひ、一

日の内に新羅、百濟、残る処無く馳せ廻りて、剩へ釈尊御説法の砌、靈山淨土に参り、新たに忝くも釈尊四八の相好を拝し奉り、迦綾梵音を聴聞したまふ。是即ち吉き馬を持ちたる故と承る」と申し給へば、太子「尤も然るべし」とて、諸国に飛脚を遣すに、国々より十疋、二十疋、百疋、千疋進上す。中にも甲斐国より御馬壹疋進る。……この馬は一日に千里を飛ぶべき瑞相有りて、この馬に召さるべく定む。調子丸を舍人と為し、八月上旬に、日本国の境を御覽ずべしとて、甲斐の黒駒に普門示現の鞍を置き……既に舍人の調子丸、馬を庭上に引き立て、調子丸ばかり御馬の右に副ひ申す。太子御馬に召し、利生の鞭を当て、御馬膝を折り通と挙がるかとすれば駿河国富士の頂に御馬を休む。人々はただ空を見奉るばかりなり。

守屋との戦いに先立って、蘇我馬子は龍馬を求めるよう助言する。合戦を目前にしているとは思えない悠長な進言であり、いかにも蛇足の感がある。この太子の龍馬すなわち甲斐の黒駒説話は、『聖徳太子伝暦』以来、広く知られた説話であった。ただし、『聖徳太子伝暦』や『太子伝』では、太子が黒駒を得るのは二十七歳の時の



ことになっており、十六歳の時の守屋合戦とは関係がない。おそらく『善光寺縁起』の編者は、縁起に聖徳太子説話を組み込むに際して、有名な黒駒説話をどうにかして本筋に取り込もうとしたのであろう。そのため、守屋合戦とは全く異なる箇所からこの説話を持ってきたのであるが、残念ながら成功しているとは言いがたい。

『鈴鹿の物語』の編者もまた、聖徳太子の黒駒説話、週れば釈迦の健陟（金泥駒）説話のように、田村は龍馬を駆ってしかるべきだと考えたのであろう。しかしながら、先にも触れたように、物語を読む限りでは大嶽退治に際して龍馬が登場する必然性はない。馬は大嶽の城に向かう際に描かれるだけで、それ以後は全く登場せず、大嶽との戦いにも何ら関わっていない。大嶽を討った後には、定業で他界した鈴鹿を追って田村が冥途へ行くという展開になるが、その際にも龍馬は関わらない。<sup>30</sup>

同じく龍馬の登場する『毘沙門の本地』では、死んだ姫宮を追って金色太子が異境を旅する際には馬の力が不可欠であった。『梵天国』でも、梵天国はこの世界と隔絶した場であって、常の手段では到達できないのだと思わせるだけの説得力がある。一方、『鈴鹿の物語』の大嶽の住処は、陸奥国霧山が嶽という具体的な地名で記さ

れており、通常的手段では行き着けないという説明もなく、苦勞して入手・育成した馬の役目は「三百余里の道なれ共、たゞ一足にぞ飛つかせ給ひけり」で終わってしまふ。詰まるところ、『鈴鹿の物語』の編者は、空飛ぶ馬というものをうまく扱えていないのである。このちぐはぐさの源は、やはり、朝敵討伐に先立って名馬を求めよという助言そのものが他説話からの借り物であること示唆するように思う。

既に述べたように、『鈴鹿の物語』は金飛礫退治の描写について『太子伝』の東夷鎮圧説話を利用した。その際、本来なら怪物退治譚にふさわしくない部分まで取り込み、若干の不合理をはらむことになった。それと同様のことが、この龍馬入手の箇所にも起きているのではないか。すなわち、敵と戦う前に龍馬を用意せよという助言と、助言に基づく龍馬入手、そして龍馬に乗って山まで飛ぶという要素を『善光寺縁起』から取り入れ、しかしそれを生かし切れなかったのではなからうか。

以上、金飛礫をきっかけとして『鈴鹿の物語』と聖徳太子説話との関わりを取り上げてきた。『鈴鹿の物語』の編者は、聖徳太子に関する説話のうち、東夷鎮圧説話

を『太子伝』から取り込み、龍馬育成の助言を『善光寺縁起』から取り込んだ、という推測である。もつとも、『鈴鹿の物語』の編者が『太子伝』の太子説話と『善光寺縁起』の太子説話を明確に区別していたかどうか、また、それぞれの作品に書物の形で接していたかどうかは定かではない。しかし、『鈴鹿の物語』に取り込まれた二つの聖徳太子説話の要素は、それぞれ別の系譜に属するものであるという程度のこととは言ってもよからう。

聖徳太子説話に基づくと思われる二箇所は、どちらにも、説話を取り込む際の継ぎ目が見え隠れしている。それを見ると、『鈴鹿の物語』が先行説話の組み替えと継ぎ足しとに基づくところが極めて大きい作品であるということを再認識せざるを得ない。例えば前半に登場する悪路王退治譚は『酒吞童子』との類似を強く感じさせる。としひとの唐土攻めは『今昔物語集』巻十四・四十五話や『雑談鈔』七話の説話を骨子としている。後半の高丸退治は『神道集』巻四・十七話に基づく。このような中に、新たに聖徳太子説話を加えることになったわけであるが、それは結局、編者の力量の限界を暴露するものでもあるだろう。編者は、先行する説話や作品に基づかないことには、魅力的な怪物退治譚を構成できなかったのである。

る。もちろん、これは他の御伽草子にも言えることであるが、その傾向は『鈴鹿の物語』において殊にはつきりと現れていると言えよう。

また一方で、以上の検討は、中世における聖徳太子説話の受容のあり方についても示唆を与えている。今回取り上げた東夷鎮圧説話に関して言えば、この説話は幸若舞『百合若大臣』の蒙古合戦譚に影響を与えていることが夙に知られている。<sup>(3)</sup>金飛磔退治譚にしても『百合若大臣』にしても、そこに聖徳太子自身は一切登場しないものの、太子説話の影響が見られた。すなわち、聖徳太子その人を描く場合以外にも、聖徳太子説話や『太子伝』は、物語の素材として非常に魅力的なものであった、といつて良からう。太子伝は、説法や絵解き、太子信仰といった枠から大きくはみ出して、多くの作品に強い影響を与えていると考えねばならないのである。

## 註

(1) としひとは藤原利仁を元にして造形された人物であるが、歴史上の人物と区別するため平仮名で表記し、子としむねもそれに準じた（引用はその限りではない）。また、としむねは作中で「田村（殿）」「田村の將軍」と呼ばれるようになるため、本稿でも、必要に応じてこれ

らの呼称も使用した。この「田村」という呼称は、としむねが坂上田村麻呂の説話を元に造形されていることによる。

- (2) 横山重氏編『神道物語集』(古典文庫、一九六一年)所収。特異な異体字は通行の表記に改めたほか、明らかに誤字は他本と対校の上で訂正した。振り仮名はごく一部を除いて略した。また、(一)内の傍書は読みの便宜のために引用者が付したものである。

- (3) 諸本おおむね「かなつぶて」とするが、大東急記念文庫蔵本は「かな丸のにうだう」、流布本(古活字版、整板本)は「りやうせん」と名づけている。また、高野辰之旧蔵本は「こんさうほうし」という名も用いる。

- (4) 文治五年九月二十八日条「源頼朝ハ」御路次之間。令臨一青山給。被尋其号之處。田谷窟也云々。是田村磨利仁等將軍。奉綸命征夷之時。賊主悪路王并赤頭等構塞之岩屋也。其巖洞前途。至于北十余日。隣外浜也。坂上將軍於此窟前。建立九間四面精舍。令摸鞍馬寺。安置多聞天像。号西光寺」(新訂増補国史大系『吾妻鏡』)。

- (5) 卷四・十七話「信濃国鎮守諏方大明神秋山祭事」。類話は『諏方大明神画詞』、『神明鏡』などにも見られる。

- (6) 拙稿「『鈴鹿の物語』の諸本—本文系統の整理をめざして—」『国語国文』八一巻七号、二〇一二年七月。また、その後に紹介された國學院大学図書館蔵本を含めた諸本分類については、『鈴鹿の物語』の編集と変容」(博士論文、大谷大学、二〇一三年)第二章にまとめた。なお、写本系と流布本系の相違については、拙稿「『鈴

鹿の物語』から『田村の草子』へ—写本から流布本への変容—」(『文芸論叢』八一号、二〇一三年一〇月)で論じた。

- (7) 月本直子氏・月本雅幸氏編『宮内庁書陵部蔵本 宝物集総索引』汲古書院、一九九三年

- (8) 日本の山賊・海賊の列挙は、一巻本および久遠寺蔵本以外には見られない。久遠寺本「奈良坂ノ金ツブテ、鈴カ山ノ立エボシト云シ山ダチ、又、ウミノ平三、ヒカタノ禪師ト申海賊、何力安穩ニテハテタルハ侍ル」(小泉弘氏編『古鈔本 宝物集』貴重古典籍叢刊、角川書店、一九七三年)。

- (9) 三角洋一氏編『石清水物語』中世王朝物語全集、笠間書院、二〇一六年

- (10) 新日本古典文学大系『舞の本』

- (11) 引用した寛永整板本では「鈴鹿山の立烏帽子」となっているが、他本は多く「鈴鹿山の盗人」とする。しかし、一方では「かなつぶて」という固有名詞を挙げ、もう一方が「盗人」では対句的表現としてうまく対応していない。本来的には「立烏帽子」とあるべきであろう。

- (12) 『長秋記』保延元年八月十九日条「忠盛朝臣虜海賊七十八人、渡検非違使。……日高禪師為賊首」(増補史料大成『長秋記』)。

- (13) 新日本古典文学大系『保元物語 平治物語 承久記』による。金刀比羅本にも同様の記述がある。

- (14) 流布本『保元物語』の引用は日本古典文学大系『保元物語 平治物語』付録による。なお、立烏帽子について

の考察は、金子恵里子氏「鈴鹿御前・立烏帽子を巡る伝承世界」(『伝承』二号、二〇〇六年)に詳しい。

- (15) 『宝物集』諸本において、日本の山賊・海賊の列挙は、一卷本と久遠寺本以外では省略されている。このことは、康頼の挙げた賊徒が時とともに忘れられ、具体例として機能しなくなったということを意味しているよう。

- (16) 近代の研究としては、平出鏗二郎による指摘が古い(『室町時代小説集』精華書院、一九〇八年)。なお、文明十八年頃「坂上田村麻呂伝勘文案」(『図書寮叢刊・壬生家文書・二』所収)で既に、時代や氏の錯誤について「田村丸は前輩也、利仁は後人也、又異姓也、以外相違たる歟」という指摘がある。

- (17) 横山重氏編『室町時代物語集・一』大岡山書店、一九三七年

- (18) 本作で討伐の宣旨が下った敵は、和解することになる立烏帽子(鈴鹿御前)以外、全てとしひと・としむね父子に討たれており、生け捕りにされたものは金飛礫しかない。

- (19) 『中世聖徳太子伝集成・二』(勉誠出版、二〇〇五年)解題(牧野和夫氏)に基づく。阿部隆一氏の分類における文保本太子伝記(狭義の文保本)と、それに連なる諸伝本を総称したもので、『正法輪蔵』や覚什(覚斤)の仮名本、寛文六年刊本などを含む。

- (20) 牧野和夫氏編『聖徳太子伝記』伝承文学資料集成、三弥井書店、一九九九年

- (21) 引用・訓読は日本古典文学大系『日本書紀・下』によ

る。訓注は略した。

- (22) 引用は阿部泰郎氏・山崎誠氏編『真福寺善本叢刊・五』(臨川書店、二〇〇六年)に基づいた。訓読も同書の送り仮名によったが、私意により多少変えたところもある。また、訓注は略した。

- (23) これについては渡辺信和氏「覚什『聖徳太子伝記』の東夷西戎―ふたたび太子十歳の条をめぐる―」(『説話』九号、一九九一年三月)に詳しい。

- (24) 『鈴鹿の物語』において、音響を発するという鎬矢本来の効果は、金飛礫退治譚にしか描かれていない。鎬矢自体は身馴川の大蛇退治や悪事の高丸退治にも用いられているが、この二つの場面では、鎬矢で敵を直接射殺している。

- (25) 守屋が跡見臣(迹見赤禰)に射殺されることは『日本書紀』に「爰に迹見首赤禰有りて、大連を枝の下に射墮して、大連并て其の子等を誅す」とある(崇峻即位前紀)。守屋の矢が太子の鎧に当たることや太子が命じて迹見赤禰に射させることは『聖徳太子伝歴』にある。

- (26) ここで鈴鹿が鬼に「とられ」なければならぬ理由については、拙稿『鈴鹿の物語』と『諏訪の本地』―《鬼に捕られる鈴鹿御前》と《飛ぶ剣》から―(『国語国文』八一巻七号、二〇一二年七月)で論じた。

- (27) 諸本、記述に不備が多く意味が分かりにくいのが、小野幸氏蔵本(『室町時代物語大成・補遺二』)に基づけば、まず馬を四本の杭の上に立たせ、その杭を一本ずつ抜いていくのである。最後の一本を抜いた時、馬は宙に浮く。

落語的とも言えるものであるが、馬を四本の杭の上に立たせて龍馬に育てることは『松浦廟宮先祖次第并本縁起』(『群書類従』第二輯)において藤原広嗣が龍馬を得る箇所の記述と類似する(「試櫪中打四杭。勞飼之間。漸々登立四杭。如此経数日。縮足立一杭之」)。本作の記述はこのような龍馬育成説話を誇張したものか。

(28) 引用は中島秀典氏「真名本『善光寺縁起』の翻刻(下)」(『芸能文化史』一五号、一九九七年八月)による。訓読も同翻刻の送り仮名に基づいたが、私意により多少変えたところもある。「」内は『続群書類従』(第二十八輯上)所収本により補った。

(29) 諸経や仏教説話集に見える釈迦出家譚において、悉達太子は名馬健陟を駆って舍人車匿と共に檀特山に至り、出家する。この説話は、龍馬で飛ぶこと、その際に従者一人を伴うこと、山に至ることの三点において、聖徳太子黒駒説話と共通し、また、『鈴鹿の物語』とも共通する。

(30) 物語前半での悪路王退治の際には、としひとが悪路王の龍馬を利用して城壁を飛び越えるという描写がある。

この悪路王退治と大嶽退治は、妻を鬼の元から奪回すること、鬼の留守中に忍び込むこと、鬼の城へ行く時に龍馬に乗ることなどが共通しており、繰り返し感がある。これについての解釈は今後の課題であらう。

(31) 岡田希雄は、『百合若大臣』における蒙古の四將軍の名や蒙古の戦法などの描写が、太子伝に由来することを指摘している(『幸若舞の研究』『日本文学講座・四』改